体験版

# 奴隷母のなげき

鮎川かほる

　秋川理沙は、娘と肉体関係をもった新藤航から加虐的な行為を露骨に見せつけられた。娘の美音は涙を見せながら新藤に躯を弄ばれている。理沙は決心した。娘の身代わりとなることを新藤に申し出たのだ。それは奴隷母としての扉を開けることとなった。

「ママさん、今日もお綺麗だ。美音よりそそられる躯だぜ」

大柄な体躯の若者は下品な笑みを剥き出しに

しながら、母親の秋川理沙に粘い視線を送ってくる。うつむいている美音の腰を淫らに抱いていた。美音は黙って腰を抱かれており、さらに母親の面前だというのに、尻をスカートの上から撫でられている。若者は、これみよがしに母親の理沙に見せつけているのだ。やがて娘の尻を撫でながらリビングを出て行った。２階の美音の部屋に上がっていくのだ。

　娘の美音は、大学に入学した直後から同じ大学の学生と付き合うようになった。その男は、新藤航といった。新藤は、美音と肉体関係にあることを母親の前でも隠そうとしないのだ。さらに母親の理沙にも若い欲情の目を露骨に向けてくるのだ。未亡人の理沙にはこの異常な状況を一人で抱えなければならなかった。

　美音に、新藤との交際をやめるように言った。
「ママ、できないの･･･」
美音はそう言ったきり泣きじゃくった。交際をやめることができないというがその理由は話さなかった。
「だいじょうぶよ。わたしが彼と話すわ」
理沙はすすり泣く娘の背中をやさしくさすり続けた。
　新藤と会ったのは、駅前の喫茶店だった。
遅れてやってきた新藤が席に座るやいなや
「美音と別れてください」
と切り出した。
「別れる？そんなこと母親でも口出しできないぜ。恋愛は自由だからな」
新藤は煙草をゆっくりと取り出し咥えた。ふ

てぶてしい態度だ。

「あなたは娘と強引に関係をもったのではないですか」

理沙はにらみつけた。つぶらな瞳で射すくめるが、新藤は気にするそぶりも見せない。

「俺がレイプしたとでも言うのかい？」

煙草の紫煙を吐き出しながら言う新藤の声は大きい。店内にいる他の客たちがその声を耳にして何事かとちらちらと見ている。「レイプ」という衝撃的な言葉が周囲の席に届いたのだ。

理沙はまわりからの注目される視線を浴び、

「そんなことは言っていないわ」

と声を潜めるが、新藤はおかまいなしに

「あんたの娘とセックスしようがそれはおれたちの勝手だろ？自由恋愛だからな」

とにやりとする。

「とにかく別れてください」
と理沙は小声ながら力を込めた。じっと新藤を見つめる。
「それじゃあ、あんたが俺とつきあうかい？俺はむしろその方がいいんだぜ。あんた、色っぽい尻しているもんな。俺がもっと磨きあげてやるぜ」
学生の言葉とは思えない。新藤の言葉にかっとなった理沙は、
「ふざけないで！」
と気色ばんだ。つい声が大きくなる。
「ふざけてなんていないさ。本気なんだぜ。あんたが俺の女になれば、美音にはもう手を出さない。誓うぜ。あんたの裸を想像しただけで、おっ立っちまっているぜ」
とせせら笑う。理沙はきりっとにらみつける

と、席を立った。

　その夜も新藤はやってきた。帰宅した美音にべったりと貼り付くようにその身体を抱きながらリビングに入ってきたのだ。母親の理沙に見せつけるように美音の尻を撫でる。露骨だった。美音の弟もリビングにおり、美音は激しい羞恥に母親似の美しい顔を朱に染めている。

「サドマゾって知っているかい？」

新藤は美音の尻を撫でながら唐突に言った。理沙は黙ってうつむいた。息子の拓斗もうつむいているが、ときおり尻を撫でられている美貌の姉をちらちらと見ている。母親似の美しい姉が大柄な男の言いなりになっている。才色兼備な自慢の姉が付き合うには不似合いな男だ。

「美音はまだまだなっちゃいねえ。マゾ女になるように調教中なのさ。今夜も厳しくするぜ」
ビシッと乾いた音が響いた。新藤は家族がいるというのに美音の尻をスカートの上から叩いたのだ。尻を叩かれた美音は
「ううっ」
とくぐもった呻き声をあげたが、反抗するそぶりを見せない。
「俺たちはこういうサドマゾの仲なのさ。ふふふ、一度知るとやみつきになるぜ」
リビングを出る新藤は美音のスカートの中に手を入れ、尻を撫でていた。
「ママ、姉さんはどうしてあんなやつと･･･警察に相談した方がいいよ」
拓斗は両手を握りしめ、ぷるぷると震えてい

る。

「ママに任せてほしいの。わたしが何とかします」

理沙は唇を噛み、美音が新藤に抱かれながら消えていったリビングのドアをじっと見つめた。

　昨日と同じ喫茶店だった。眼の前の新藤は煙草を吸っている。

「美音と別れてください。そのかわり･･･わたしが身代わりになります」

理沙の声は震えていた。新藤と対峙するまで、何度も胸の内で繰り返していた言葉だ。身代わりになるということの重大さにおののきながらもあまりにも哀れな娘を救いたい一心で決心を固めた理沙だった。警察には相談できない。美音の表情から公にできない事情があ

ることを理沙は察していた。
煙草を吸っていた新藤が身を乗り出し、
「身代わりとは失礼な言い方だな。それじゃあ、まるで俺が美音を強引に抱いているみたいだぜ。俺たちは恋人の関係だと言ったはずだ。サドマゾのな」
新藤は紫煙をゆっくりと吐いた。
「美音はいやがっています」
理沙は新藤をにらみつけた。美しい顔がこわばっている。
「まあ、いいや。それであんたが俺の女になると言うんだな？」
とじっと理沙を見つめてくる。視線をそらした理沙はこくりと頷いた。
「俺好みの女になるんだな？サドマゾだぜ。貞淑なママさんに務まるかな。えげつないこ

ともするぜ。無理じゃないのかな」
と言い、目で笑った。
「娘にはこれからは絶対に手を出さないと約束してください」
そむけていた顔を正面に向けた理沙は、真剣な表情だ。
「ママさん次第だな。俺を満足させればいいだけのことさ。俺の加虐性愛を積極的に受け入れなよ。俺は女を痛めつけたり辱めたりすることで興奮する男だ。それもいいんだな？」
理沙はうなだれるように頷いた。
「よし！契約成立だな。それじゃあさっそく辱めてやるぜ。パンティを脱ぎな」
理沙は目を見開いた。
「これからはこういう関係になるのさ」
新藤が笑う。